

# サー・トマス・ブラウンとサミュエル・ テイラー・コールリッジ (1)

河 野 豊

## 【要 旨】

コールリッジが残した膨大な書き込みの中からブラウンに関係するものを取り上げ、両者の関係について論じる。最初は、コールリッジが思いを寄せていたセアラ・ハッチンソンへの書簡から、コールリッジのブラウン批評とでも言うものについて検討し、セアラ・ハッチンソンとコールリッジの関係にも触れる。

## 【キーワード】

17世紀、散文、書簡、トマス・ブラウン、コールリッジ

## はじめに

イギリス文学史においてサー・トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-82) を称賛した詩人・作家は枚挙にいとまがない。中でもロマン主義時代の詩人、文人たちは、ブラウンへの偏愛を語る。ラム (Charles Lamb, 1775-27) 然り、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) 然りである。ラムは、そのエッセイの中で、たびたびブラウンを引き合いに出し、親しみを込めて語る。

コールリッジが読んだ書物の余白に大量の書き込みをしていたことはよく知られているが<sup>1</sup>、それらの書き込み及び書簡等から窺えるコールリッジのブラウン観を検討し、両者の関係について論じる。

## 1 コールリッジの書簡

コールリッジは1804年3月10日夜12:00にセアラ・ハッチンソン (Sara Hutchinson, 1775-1835)<sup>2</sup>に宛てて、以下のような書簡を書き込みとして書いている。<sup>3</sup>

1804年3月10日 土曜日 夜12時

サー・トマス・ブラウンが一番のお気に入りです。種々様々な知識が豊かで、いろいろな観念や奇想にあふれ、瞑想的で、想像力に富んでいます。文体と語法については多くの場合、真に偉大で荘厳です。もっとも確かにあまりに大仰で堅苦しく、極度にラテン語的になることもしばしばですが。このように私がサー・トマス・ブラウンのことを述べたとしても嘘が混じることはないでしょう。私の説明に欠点があるとすれば次のようなことだけでしょう。つまり、そのことは

エリザベスの治世の始まりからチャールズ2世の終わりまでのほかの半ダースの作家にも同じように、あるいはほとんど同じように当てはまる、ということです。ブラウンは実際これら全てでした。これらを超えるブラウン独特のものを私は、次のように言うことで自らの心にくらか伝えているようです。すなわち、ブラウンはかなり夢想家気味の物静かで気高い熱狂者、また琥珀織りの絹の放つ色が主染料の上で戯れるように、たえず哲学者と交わり、その姿がちらつく諧謔家、と。要するにブラウンの頭には優れた頭脳があり、その頭は頭脳にちょっとした捻りがあるゆえに一層興味深いのです。ブラウンを読む人は時にモンテーニュを思い起こすかもしれませんが、それはもっぱら両者に共通する自分語りという全般的な状況のためでしかありません。モンテーニュの自分語りは単に面白い閑談、雑談、益体もない気まぐれや奇癖であることが多いのですが、ブラウンの場合は常に、好奇心旺盛な知性を併せもつ感じやすい心の結果です。他人を自分のように愛し、他人について話すのと同じくらい親しく自分自身について話すという習慣や特権を得た人間にはまさにふさわしい自分語りです。珍しいものを好み、風変わりなもの、不思議なものを追い求める一方、ブラウンは自分のことを、一風変わったユーモラスな厳粛さで、自然界の真理と基礎科学の探究者と考えていました。ブラウンは自らの思索と感情を熟考し、また論ずることを好みました。それというのもそれらもまた珍しいものであることが他人との比較によってわかり、だから見事なほど優雅にまた興味深いほど苦も無くそれらを自分の博物館と陳列室の中に片づけたのです。実際ブラウンは間違っていないで、自分自身の光に照らしてあらゆるものを完璧に見て、太陽でも月でもなく、またろうそくの光でもなく、自分の頭の周りの優美な光輪の光に照らして自然を読みました。その結果自然はブラウンにその思索の専売特許を無期限に与えたと言えるでしょう。中でも『壺葬論』を読んでごらんください。奇抜なことや、あらゆる空想や例証の方法にみられる他ならぬサー・トマス・ブラウンらしさに加えて、その全体性に驚き、感じ入ってください。それはブラウンの前にあり、彼はソレニ完全ニ没入シテイルし、それを追求します。決して逸れたりはしません。逸れる理由もありません。なぜならたまたま自分の主題となったものが何であれ、ブラウンは万物をその主題へと一変させるからです。あの『壺葬論』、すなわち「ノーフォークで発掘された骨壺に関する論文」は一行一行が土みたいで、なんと墓や納骨堂のにおいのすることでしょう！ あなたは、ある時は墓場の土、ある時は大腿骨、ある時は頭蓋骨、またある時は朽ち果てた棺の破片を手に行っているのです！ 苔が墓碑銘を覆った古い墓石のかけら——亡霊それとも経帷子、あるいは11月の風に乗ってくる吊いの聖歌の響き——そしてあなたが出くわすことになる最も楽しいものは、銀の釘や棺の蓋に書かれた金箔の西暦でありましょう。まさに同じ見方が、興味深さははるかに劣りますが、あの興味深い「古代人の五点形植樹法に関する論文」に同程度当てはまります——奇抜なものへの同じ注目、見慣れない事細な植物の形態への同じ注目——主題の全体性——上は天にある五点形、下は地にある五点形、また地の下の水の中にある五点形、神性にある五点形、人間の心にある五点形、骨に、視神経に、木の根、葉、花びら、あらゆるものの中にある五点形！ 早い話、まずこの書物の最終ページをめくって、第五章終盤の「更に考慮すべきこと」云々という言葉で始まる最後の七つの段落を朗読してください。——とは言えそろそろ寝る時間です。サー・トマスの言葉で言えば、それは彼の文体のいい見本として、わが愛しのセアラ！、あなたのためになるでしょう。「だが、天上の五点形（その頃〔訳注：3月〕の地平線付近のヒヤデス星団つまり五つの星）が下降し、我々が認識の五つの港すなわち五感を閉ざす時間！ 覚醒時の思考を眠りの幻影の中へと引き延ばすのは気が進まない。眠りはしばしば蜘蛛の巣の太綱や見事な木立の荒野を作り出して元の思考を続ける。目をもう少し長く開けてれば、対蹠人アンティポデーズに扮することになるだけだ。狩人たちはアメリカで起きている。そして彼らはペルシャで最初の眠りをもうすでに経てきている。」ねえ、愛し

のセアラ！、考えてもごらん。真夜中に眠りにつくのにそんな理由が今までつけられたことがあったかって。つまり、よもや考えていなくても、私たちは対蹠人アンティポデイズになっているなんて！！ それから、「狩人たちはアメリカで起きている」——すごい迫力！　すごい空想！　だからあの一風変わった勲爵士は私たちに濃い緑茶を入れてくれて、それをアヘン剤と呼ぶのでしょうか？　あなたはきっと静かにお休みでしょうね。

そしてすべての星はまるで眠っている大地を見守るかのよう  
あなたの住まいの上方で静かに明るく輝いている！

この書簡はコールリッジのブラウン批評と言えるものであるが、その筆致からはコールリッジがいかにブラウンに夢中になっているかが見て取れる。「サー・トマス・ブラウンが一番のお気に入りです」と断言するところから書簡は始まり、以下、ブラウン礼賛の言葉が連ねられる。コールリッジの書簡の中で、とりわけ目に付くのは、「瞑想」「奇想」「風変わり」「想像力」「奇矯」「夢想」「諧謔」「熟考」「知性」「探究」といった言葉である。ブラウンについて言われたこれらコールリッジの言葉は、ありていに言って、コールリッジ自身にも当てはまるのではないだろうか。誤解を恐れずに言えば、コールリッジはブラウンの中に自分自身と同じ感性を見出したのではないだろうか。もちろん両者は、生きた時代も違えば、生き方も違う。ブラウンの生きた17世紀は2つの革命の間に共和政があるという前代未聞の時代であった。コールリッジの生きた18世紀後半から19世紀初頭は産業革命が進行し、文学が商品として社会経済活動の中に組み入れられていく時代であった。「文学」という概念そのものもまた異なっていた。にもかかわらず、時代を超越した共振性をコールリッジはブラウンに対して抱いていた。

さて、コールリッジはモンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533-92) とブラウンを比較して、上述の書簡で以下のような注目すべきこと述べている。

モンテーニュの自分語りは単に面白い閑談、雑談、益体もない気まぐれや奇矯であることが多いのですが、ブラウンの場合は常に、好奇心旺盛な知性を併せもつ感じやすい心の結果です。他人を自分のように愛し、他人について話すのと同じくらい親しく自分自身について話すという習慣や特権を得た人間にはまさにふさわしい自分語りです。

ブラウンとモンテーニュの比較は、コールリッジが初めてではない。それどころかブラウンの生前にすでに類似性を指摘した者もいた。<sup>4</sup> ブラウンは後年それに対して「私とその作品（『医師の信仰』のこと。引用者注）を書いたとき、その著者（『モンテーニュ』のこと。引用者注）のものは6ページも読んだことがなかったし、その後もほとんどそれ以上読んでいない」と述べている。<sup>5</sup> ブラウンの言葉の真偽は定かでないが、積極的に疑う理由もない。いずれにせよブラウン自身モンテーニュと比較されることを自覚していたことは興味深い。<sup>6</sup> コールリッジの上記引用で、彼がモンテーニュよりもブラウンを評価しており、しかもその評価に値する点が「好奇心旺盛な知性を併せもつ感じやすい心」であるというのは、ブラウンの知性と感性とが一体のものであるとのコールリッジの認識から来ている。その点でコールリッジはT. S. エリオットの言う「統一された感受性」を先取りしているように思われる。

またそもそもコールリッジがこの書簡を書くきっかけとなったのは、友人であったチャールズ・ラムがコールリッジのためにブラウンの本を購入したからであった。<sup>7</sup> ラム自身もブラウンを好んでおり、『エリア随筆集』をはじめとして様々な作品にブラウンの名前が出てくる。ラムと

ブラウンについて、「ラムの後半生を通してブラウンの影響は明らかだ」と言う人もいる。<sup>8</sup>

もう少しコールリッジの書簡を詳細に見てみよう。冒頭部分の「種々様々な知識が豊かで、いろいろな観念や奇想にあふれ、瞑想的で、想像力に富んでいます」という文中の「奇想」は原文では“conceits”である。「奇想」とは辞書の定義によれば、“A fanciful notion; a fancy, a whim” または“A fanciful, ingenious, or witty notion or expression”(OED)であるが、それこそブラウンの最大の魅力の一つであり、コールリッジがしきりに驚嘆、称賛したものである。<sup>9</sup> ブラウンは『医師の信仰』の「読者へ」において、次のように述べている。

修辭的に述べられたことも多く、単に言葉の綾でしかないことも多く含まれている。私の真意を明らかにするのに最善だからである。それゆえ、理性の厳格な吟味に頼らずに、柔軟な、また緩やかな意味で受け取ってもらいたいものも数多くある。<sup>10</sup>

上記から明らかなように、ブラウンは自らの文体について意識的であった。「奇想」を含む様々な隠喩を駆使したその文体は、ラテン語法と相俟って、読解を困難なものにしている。

コールリッジはブラウンを「諧謔家 (humourist)」と呼ぶ。“humourist”という語は、OEDによれば、1830年が最後の用例の“A person subject to ‘humours’ or fancies; a fantastical or whimsical person; a faddist.” という意味もあり、それは「空想家」あるいは「夢想家」と訳せるが、コールリッジは別に“fantast”という語を使用しているので、ここでは「諧謔家」とした。というのも、ブラウンの著作はユーモアからほど遠いように考えられがちであるが、ときどき思いがけないユーモラスな個所も見受けられるからである。「奇想」との関連で言えば、「貪欲は嘆かわしい狂気のしるし、これに比べれば自分のことを手鍋だと思ったり、我々はすでに死んでいると考えたりするのは、さほど馬鹿げたことではない」(『医師の信仰』第2部第13節)という個所がその一例である。<sup>11</sup> コールリッジはそうしたブラウンの諧謔性を感知していたと考えてもよいのではないだろうか。

書簡の中の「かなり夢想家気味の物静かで気高い熱狂者」という表現は、矛盾した言い回しである。ここで「熱狂者」と訳した語は、“enthusiasm”だが、原義の「神がかった」というニュアンスを入れて訳した方がよいかもしれない。いずれにせよコールリッジにとって、ブラウンは「熱狂者」、すなわち「何かを情熱的に追求める人」であった。書簡の中の「たまたま自分の主題となったものが何であれ、ブラウンは万物をその主題へと一変させる」と述べた個所はブラウンのそうした探究者としての姿勢を端的に表現している。ブラウンの探究の姿勢をコールリッジは「決して逸れたりしません」と言っているが、その点に関してコールリッジはブラウンと異なっている。コールリッジは以下のような文章を書き、脱線しがちな自分を弁明している。

本書の主題からかなり脱線してしまいましたが、それは、話の本筋から逸れずにいられなくなった私の気持ちに対して敬意を払ってくれるような読者を念頭に置いてのことでした。ですからここでも敢えて、そのような気持ちに共鳴してくれる読者が、少なからずいることを当てにしようと思います。<sup>12</sup>

コールリッジのこの言葉の中の「敬意」と「共鳴」を彼はセアラに対して求めていたのかもしれない。冒頭のコールリッジの書簡はいわゆるラブレターほど直接的な愛情表現ではないが、ブラウンの文章を是非セアラにも読んでもらい、自分と同じ感情を共有してもらいたいという願望の表れと読める。

コールリッジについてよく指摘されるのは、「仕上げの欠如」ということであるが、脱線ないし放置ということも同様である。<sup>13</sup> ブラウンの主題探求の執拗さ、徹底さをコールリッジは率直に賞賛している。主題を巡って繰り返される思索という無数の変奏——隠喩、逆説などの修辭的技法、ラテン語法を駆使した——変奏をコールリッジは賞玩する。そこにおいては内容もさることながら、ブラウンの文章を読む際の愉楽、美的快感、英語との戯れといったものをコールリッジが感じ取っていると言うのは言い過ぎであろうか。<sup>14</sup> ブラウンの文章が音楽的だとはよく言われることであり、しばしば教会のパイプオルガンにも譬えられる。音楽を聴くときの快感がブラウンの文章から生まれるのかもしれない。

『壺葬論』は・・・一行一行が土みたいで、なんと墓や納骨堂のにおいのすることでしょう！」という個所では、感嘆符付きで作品全体の印象を語っているが、この個所以外でも見られる感嘆符の多さは書簡とは言えコールリッジの興奮の大きさの表れであろう。

「上は天にある五点形、下は地にある五点形、また地の下の水の中にある五点形、神性にある五点形、人間の心にある五点形、骨に、視神経に、木の根、葉、花びら、あらゆるものの中にある五点形！」<sup>15</sup> という個所にもまた彼の興奮が表れている。また、そう述べるコールリッジの口調は、彼の“The Rime of the Ancient Mariner” (1798) Part II の‘Water, water, every where’のリフレインと通じるものがあるかもしれない。

「だが、天上の五点形・・・」で始まるブラウンの文章は、『キュロスの庭園』の中でも特に広く知られた個所であり、「五点形」に憑りつかれたブラウンの思索の特徴をよく表している。

「あの一風変わった勲爵士は私たちに濃い緑茶を入れてくれて、それをアヘン剤と呼ぶのでしょうか？」の個所についてであるが<sup>16</sup>、「勲爵士」とは晩年ナイトの称号を授与されたブラウンのことだが（それゆえ、名前に「サー」がつけられる）、そのブラウンが「入れてくれた」緑茶を「アヘン剤」と呼ぶのかとコールリッジは訊いている。アヘン剤は鎮痛剤、催眠剤として使用されるもので、周知のように、コールリッジは持病のリウマチのためにそれを服用していた。緑茶の効能はその逆で、覚醒作用などである。コールリッジの疑問、つまり「ブラウンは「緑茶」を出しておきながら「アヘン剤」、つまり全く正反対の効能をもつものと呼ぶのか」は、ブラウンがそう呼んでいるのではなくて、コールリッジ自身がそう呼んでいるのである。アヘン剤だと言われて飲み、幻覚、白昼夢、妄想を期待していたら、実際は緑茶で幻覚どころか神経を昂らせ、興奮してしまったコールリッジの戸惑いが表れている。また、アヘン中毒でアヘンが身近にあったコールリッジにとって比喩としてアヘンを持ち出すのは、ごく自然なことだった。そこにはコールリッジならではの賞賛が込められている。

愛する人に自分のお気に入りのものを勧めるコールリッジの書簡は、それをその人にも気に入ってもらいたい、同じものを共有したいという気持ちに溢れている。何かを共有することによって、二人の間により親密さが増すことを期待しているかのようである。しかしコールリッジの気持ちはその人には伝わらなかったという結末を知っている我々にとって、その書簡はコールリッジの一人芝居でしかなかった。<sup>17</sup>

(「サー・トマス・ブラウンとコールリッジ (2)」に続く)

## 注

<sup>1</sup> コールリッジの書き込み (Marginalia) 全般については、H. J. Jackson & George Whalley (eds.), *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, Vol. 12, Part I-VI* (1980-2001) 参照。

<sup>2</sup> ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の妻メアリー (Mary Wordsworth, 1770-1859) の妹。コールリッジは 1799 年に出会ってから叶わぬ恋心を抱いていた。

<sup>3</sup> Roberta Florence Brinkley(ed.), *Coleridge on the Seventeenth Century* (Duke University Press, 1955), 447-49. 但し、448 ページの 1 行目と 2 行目は誤植により入れ替わっていると思われる。コールリッジが書き込んだ書物は、Brinkley によれば、1658 年刊で、『伝染性謬見』第 4 版 (Pseudodxia Epidemica) に加えて『壺葬論』及び『キュロスの庭園』が入ったものであった。Sir Geoffrey Keynes, *A Bibliography of Sir Thomas Browne*, 2nd rev. ed. (Oxford University Press, 1968) によれば、大きさは四折判 (quarto)。

<sup>4</sup> 1656 年版『医師の信仰』に注釈を書いた Thomas Keck。

<sup>5</sup> Sir Geoffrey Keynes(ed.), *The Works of Sir Thomas Browne*, 2nd ed., vol.3 (Faber & Faber, 1964), 290.

<sup>6</sup> ブラウンとモンテーニュについては、拙論「「エッセイ」の「発見」とサー・トマス・ブラウン」『別府大学紀要』第 43 号 (別府大学、2001)、1-9 参照。

<sup>7</sup> ラムの購入した本については、注 3 参照。ラムが『エリア随筆』の中の「人間の二種族」の中でコールリッジに本を貸すと、利息 (書き込み) をつけて返してくれると書いているのはよく知られている。

<sup>8</sup> Joseph Seeman Iseman, *A Perfect Sympathy: Charles Lamb and Sir Thomas Browne* (Harvard University Press, 1937), 17.

<sup>9</sup> 「奇想」については、拙論「サー・トマス・ブラウンと「夢」」(『英語英米文学論叢』第 30 号、別府大学英語英文学会、1998)、1-14 参照。また、コールリッジは、ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の詩への書き込みで、「この素晴らしい詩を読んで、かつて書いた『駄洒落の弁護』というエッセイの続編として『コンシートの弁護』というものを思いついた」と書いている。(Brinkley, 526.)なお、『駄洒落の弁護』は現存しない。ダンの詩、「桜草」の最終連は以下の通り。「そういう訳 (わけ) だから、桜草よ、／本来の五弁のまま栄えよ。／五という神秘的数字は、お前に相応しい。／十は最高の数、その半分の五があるから、／残りの数を補う気なら、女よ、／我々男の半分を奪えばよかろう。／それが嫌なら、総ての数字は奇数か偶数、／それらを加えずでできる数、五にかけて、／我々男性を総て自分の虜にするがよい。(湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』(名古屋大学出版会、1996)、102)。ブラウンが『キュロスの庭園』で思索を巡らせた「五」という数字が出てくることに注目したい。

<sup>10</sup> L. C. Martin (ed.), *Sir Thomas Browne: Religio Medici and Other Works* (Oxford University Press, 1964), 2.

<sup>11</sup> ここで「手鍋」と訳した単語の原語は “pipkins” で、堀大司訳では「<sup>しゅびん</sup> 洩瓶」(1963)、生田省吾・宮本正秀訳 (1998) では「糞尿器」となっている。後者は前者の意味を引き継いだものと思われるが、そもそも堀氏が「<sup>しゅびん</sup> 洩瓶」と訳した理由は不明である。何らかの根拠があるのかもしれないが、筆者にはその根拠が思い当たらず、*OED* でも “pipkins” にそういう意味は発見できなかったため、ここでは普通の意味の「手鍋」とした。もっとも「<sup>しゅびん</sup> 洩瓶」という訳語の方がインパクトがあり、面白いことは否めない。

<sup>12</sup> S. T. コウルリッジ著東京コウルリッジ研究会訳『文学的自叙伝：文学者としての我が人生と意見の伝記的素描』叢書・ユニベルシタス 994 (法政大学出版局、2013)、69.

<sup>13</sup> 例えば、上島健吉氏は「あれほど豊かな才能に恵まれながら詩は断片に終わることが、思想も体系とはならず乱雑なメモのままに留まることが多かった。要するに彼は知的活動の破片を無数にまき散らしてこの世を去ったのである。」と述べている。(上島建吉編『対訳 コウルリッジ詩集』

岩波文庫（岩波書店、2002）、341。）

<sup>14</sup> 書簡の後ろの方で、「七つの段落を朗読してください」と述べていることに注意したい。この書簡はコールリッジが恋心を抱いていた女性に宛てて書かれていることから、コールリッジは自分が体験したのと同じ愉楽をその女性にも味わってもらいたいと思い、自分の好きなものを愛する女性と共有したいという思いを持っていたのかもしれない。

<sup>15</sup> 前半は旧約聖書『出エジプト記』第20章第4節のパロディになっている。「上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるもの」（日本聖書協会『口語訳聖書』（1955））

<sup>16</sup> “CHARACTER OF SIR THOMAS BROWN AS A WRITER”として、*Blackwood's Magazine* (vol. VI(1819), 197-98)に転載された際には、コールリッジの原文“a dish of strong green Tea”は、“the essence of gunpowder tea”（gunpowder teaとは「珠茶」のこと）という表記に変更されている（他にも「アメリカ」が「アラビア」に変更されていたり、書物の大きさを実際の“quarto”ではなく“folio”と書いているなど問題はあるが詳細は他日に期す）。なお、この記事の冒頭には、「以下は、(中略) 活字になったどの作品よりもコールリッジの会話のスタイルをよく表している」と書かれている。

<sup>17</sup> コールリッジは既婚者で彼の思いは実らず、書簡の相手セアラ・ハッチンソンはその後誰とも結婚しなかった。

